No. 223　　令和６年１月４日

校長会広報223号

発　行・一般財団法人 宮崎県校長会館
編　集・宮崎県校長会
広報委員会

校長としての仕事

諸塚村教育委員会 教育長　**竹内一久**

幸いにも私は３つの小学校で、計６年間校長として仕事をさせていただいた。

初めて校長の職に就いたときに、「これだけは必ずやりたい」と思ったことがいくつかある。それは、「校長室及び自分自身をオープンにすること」「教頭をはじめ、職員とのコミュニケーションを密にとること」「教頭はもとより職員を大事にすること」だった。

ある学校に赴任した時、その校長室は、入り口にはパーテーションが置いてあり、直接校長の顔が見えないようにしてあった。校長室から事務室、職員室につながるドアは、キャビネット等が置いてあり、行き来ができないようにしてあった。校長室のガラスもすりガラスで、外から中が見えないようにしてあった。そこで、パーテーションを取り外し、すりガラスを透明なガラスに替え、入り口を開けっぱなしにし、事務室からも職員室からも校長室に自由に行き来ができるようにした。私自身は、笑顔を絶やさないこと、職員から相談があれば自分の仕事よりもそちらを最優先し、真摯に対応し、すぐ行動に移すことを心がけた。そして、オープンマインドに心がけ、自分の弱みもさらけ出した。そうすることで風通しがよくなり、職員との関係も格段に良くなったと思っている。

校長は孤独である。だからこそ教頭や職員とのコミュニケーションを図ることはとても重要である。今はパソコン上でやり取りをしているようだが、昔は毎日教頭が学校日誌を書き、校長室に提出していた。私は、学校日誌を返す時に、メモ用紙ほどの付箋紙に思ったこと、感じたこと、考えたこと、してほしいこと、うれしかったこと、ねぎらいの言葉、感謝したいことなどを書いて毎日添付していた。職員に対しては、毎月の出席簿提出の際に、「ありがとうカード」を作り、「１か月お疲れさまでした。ありがとうございました。」のねぎらいの言葉を添えて返していた。学期終わりには、全職員一人一人にお礼の手紙を書き、前日にそれぞれ職員室の机上においていた。また、提出された通知表を点検して返す際も「お疲れさまでした」のメッセージカードを添えていた。職員の誕生日には、「誕生日おめでとうございます」のはがきを出していた。

何か用事があった時には、校長室に来てもらうのではなく、こちらから職員室や教室に出向いていくことを心がけた。職員が多い学校では、なかなか１日１回会話をすることは簡単ではない。付箋紙やメッセージカードを、コミュニケーションを図る一つのアイテムとして、上述のときばかりではなく、さまざまな場面で利用した。今は、メールのやり取りで簡単にパソコンに打ち込めばいいのだろうが、手書きという手間暇をかけることも大事なのではないかと思う。

教頭に対しては、特にコミュニケーションを密にした。教頭は、校長の一番の理解者であり、一番の相談者であり、最強のパートナーである。よく、「うちの教頭は・・・」などと嘆く校長がいるが、教頭こそ大切にしないといけないと思う。そうでなければ信頼関係は崩れ、学校経営どころではなくなると思う。

４月１日、年度最初に職員を前に言った言葉は、「学校だから先生方は子どもが一番大事だが、私にとって一番大事なのは先生方だ。先生方が笑顔で元気でなければ、子どもたちも笑顔で元気でいられるわけがない。私は全力で先生方を守る。」だった。

私が考える校長としての仕事は、いかに教頭をはじめ全職員に気持ちよく仕事をしてもらえるか、そのために校長として何ができるかを考えることだった。管理者としてではなく、学校をどう経営していくかという経営者としての視点をもつことも重要だと思う。

校長先生方、校長職は激務です。どうか御自愛ください。

会員コーナー

地域と共に・・・受け継がれてゆく伝統

都城市立縄瀬小学校　蓑　毛　隆　洋

本年度も実りの秋が来た。私の勤務している都城市立縄瀬小学校の通称「元気田」には、黄金色の穂が見事に頭を垂れていた。今年は猛暑ではあったが、台風の影響もなく、春先に植えた稲が順調に成長した。１０月５日には、全校児童と保護者、地域の環境保全団体の方々に協力をいただいて、鎌を使って手作業で稲刈りを行った。慣れない鎌を使って刈るため、始めは恐る恐る作業していた１年生も次第に自信を付け、いつの間にか笑顔になり、刈り取った稲束を大事そうに抱えて運んでいた。１２月には校内持久走大会と併せ、収穫祭が行われ、火を起こして竈で米を炊き、みんなでおにぎりを作って食べる活動が昨年度から復活している。児童にとって自分たちが植えた苗が育ち、稲に実った米を食べるという、この一連の営みを経験することは「食」や「食べ物」を大切にしようとする気持ちを育むことに一役買っていると感じる。その成果か、給食も年間を通じて、ほぼ残菜０である。

表題の言葉「地域と共に・・・受け継がれてゆく伝統」とあるが、これは、本年度１１月１９日（日）に開催された本校の創立１５０周年式典のサブテーマである。校長になってこの１年半、まさに、「地域と共に」を日々、実感している。全校児童４０名の小規模校、春先の田植えから始まり、年間を通じて多くの行事に保護者や地域の方々の温かな支援がある。行事を終えて感謝の意を伝える度に、学校運営協議会委員でもあり地域公民館長でもあるＦ様から、「子どもたちは地域の宝だから、みんなで育てないといかん。協力するのは当り前よ。」とありがたい言葉をかけていただいている。

最後に、本校には自転車競技会に参加する昭和４７年発足の交通少年団がある。毎年、選手を募り、４名の選手で大会に臨んできた。本年度、１０回目の全国大会出場を果たし、会場は何と東京ビッグサイト。全国の舞台に立つ貴重な経験。引き継がれてきた伝統に感謝。

地域のリソース（人材・資源）を授業に

新富町立富田中学校　二　宮　正　志

人口約１７０００人の町、新富町。その中心部にある富田中に赴任し、職員に伝えたことの一つが「地域とともにある学校づくり」である。地域人材・地域資源こそ子どもたちの成長に欠かせない糧となるので、どんどん授業の中に呼び込んでほしいと伝えた。

新富町は魅力的なリソースにあふれている。職員はアイデアを出して授業を企画し、これまでたくさんの方に体験談等を話していただいた。また、校舎から見える空はＦ１５戦闘機が飛び交い、職業人講話の航空自衛隊ブースでは、パイロットの説明を真剣に聴き、Ｇスーツやヘルメットを興味深く触っている生徒もいた。その他、新富町にはプロサッカーチームが２チームあり、生徒と一緒にあいさつ運動をしたり、給食を食べてもらったり、昼休みに一緒に交流したりする活動を仕掛けた。もちろんサッカーの試合には生徒たちも駆けつけ、吹奏楽部が演奏したり、サッカー部が運営を手伝ったりしている。

さらに、県生涯学習課のアシスト企業を活用し、新富町外の企業にも授業支援をしていただいている。例えばＩＣＴ関連企業には東京からスタッフを呼んでＶＲ体験をさせていただいたり、ホテル業界の方には生徒と膝をつき合わせ、マナーの大切さについて学ばせていただいたりした。みやざき家庭教育サポートプログラムでは、将来の親世代向けのプログラムを活用し、トレーナーの方に中学生対象のプログラムを実践していただいた。生徒たちは社会人の話をとても真剣な眼差しで聴いている。これらの体験が心の糧となっていると実感している。

「地域とともにある学校」は決して学校を支援していただくだけの一方向の取組ではない。地域と学校が双方向に協働するような仕掛けづくりがとても大切だと考えている。そのために、職員や生徒たちと知恵をしぼって、魅力的な町：新富町をもっと輝かせることができればと願うばかりである。

「感謝」と「称賛」

えびの市立上江小中学校　**原　田　政　文**

教諭時代の自分を振り返ってみると、生徒に対して、上から目線で注意することの方が多く、褒めることをあまりしなかったように思う。それが、ある校長先生との出会いで自分の教育観が大きく変わった。

それまでの自分は、生徒のやろうとする気持ちが見える時でも、もっとできると思い、きびしい言葉を投げかけたり、当たり前にできない生徒に注意したりで、生徒との関係はギスギスした感じであまりよくなかった。

その校長先生は、いつもにこやかに教員に対しても生徒に対しても、ちょっとしたことに「ありがとう」や「いいね」の言葉を伝えていらっしゃった。口調も穏やかでやんちゃな生徒に響くのだろうかと思っていたのだが、そんな心配をよそに、やんちゃな生徒の表情がだんだんと穏やかになり、真剣に自分のことを考えるようになっていったのを覚えている。授業にそっぽを向く生徒を何とか授業に引き込もうと苦慮されたこともお聞きした。教員を集めて模範授業をされ、生徒の興味関心を高めることや生徒が主体となる授業の展開など教示され、１時間の授業の大事さを改めて感じたところであった。

その頃から少しずつ褒めることや感謝することを増やし、時には大げさに褒めることを試みた結果、生徒との関係や職員との連携など円滑に進むことが多くなった。

管理職となった今、些細なことでも職員や児童・生徒に感謝し、ねぎらいの言葉をかけたり、称賛したりするように心がけている。ありがたいことに小中職員同士の雰囲気もよく、職員室から笑い声が聞こえてくるとホッとする。（顔を出した途端に、笑い声がピタリと止んだ時もありましたが・・）これからも周りの人に感謝し、褒めて伸ばすことを信念としてもち続け、仕事に関わっていきたい。

支会だより　＜都城支会＞

都城市立沖水中学校　**齊　藤　和　昭**

ふるさと納税日本一、肉と焼酎の町、といえば「都城」と言われるようになった。志布志・都城間の高速道路が着々と整備され、あと１区間を残すばかりとなっている。都城地区外からの移住者誘致にも力を入れている。都城支会校長会は、都城市立の小学校３５校・中学校１９校、三股町立の小学校６校・中学校１校、計６１校で構成されている。少子高齢化が進むこの日本にあって、都城地区においては児童・生徒数が増えている学校もある。

都城支会校長会の主な活動は、研修活動と情報の共有化である。小・中学校ともにそれぞれ年間５回の研修会を実施している。小学校は３班体制で、会場は学校視察を兼ねて当番校で実施される。中学校は１班体制で、会場は地区公民館で実施される。研修内容は、県大会発表内容の協議、時事的課題の協議、県校長会理事会の報告等である。県大会での発表は、担当学校が各学校の実践を収集し、一つの研究成果にまとめていく過程で、課題や成果そして校長の思いを織り交ぜながら全員で練り上げていく。５回の研修会のうち６月の第２回研修会だけは、小中合同研修会として全校長が一堂に会し実施する。本年度は、南部教育事務所長の三輪正憲様をお迎えし、「校長の仕事」という題での御講演だった。三輪所長の教諭時代から校長時代までの熱いお話にうなずきながら聞いてらっしゃる校長先生もいた。後半は、宮崎県ソフトウエアセンターの方をお招きし、「ネットトラブルを回避するために」という題で講義していただいた。ネットトラブルは喫緊の課題であり、その後の小・中別研修会の中でも議論が盛り上がった。

本会では日常的に情報を共有するためにGoogleドライブに共有のスプレッドシートを作成している。コロナ感染症により学校の諸行事がどのように行われるのか参考にしたいという校長先生方の要望から２年前に生まれた。校長同士が支え合う一つの仕組みである。

＜児湯支会＞

川南町立川南小学校　**小　島　信　二**

児湯支会は、高鍋町（小学校２校、中学校２校）、新富町（小学校１校、中学校１校、小中一貫校２校）、木城町（義務教育学校１校）、川南町（小学校５校、中学校２校）、都農町（小学校３校、中学校１校）の５町計２０校で構成されている。

本支会では、年度当初に行う総会と年間５回の研修会を実施している。研修会については、原則、県校長会理事会が開催される月に５町持ち回りで行い、会場町の教育長より講話をいただいている。全体研修会では県校長会の情報の共有化、小・中別研修会では学校経営上の課題等について率直な意見交換、情報共有を行っている。「校長は孤独である」という側面はあるものの、２０人の校長がお互いの悩みを吐露し合い、支え合っていける支会となっている。本年度は、引き続きのコロナ禍ではあるが、数年ぶりに歓迎会を実施することができた。研修会とは違う雰囲気の中、互いの顔を見て飲食を共にする時間を共有できたことは、支え合うつながりを深めるうえで意義深いものとなった。

５町はいずれも豊かな自然と温かな人々に恵まれており、各町各校ともさまざまな教育資源を生かしながら地域と一体となった教育活動を展開している。児湯支会だよりの最後に、児湯地区の教育資源の一部を紹介し情報提供としたい。それらを生かした教育活動については、各町各校のホームページ等を御参照いただきたい。

〈自然〉…… 座論梅、高鍋湿原、川原自然公園、矢研の滝、川南湿原
〈偉人〉…… 秋月種茂、石井十次、武者小路実篤
〈食〉…… レンコン、ライチ、カキ、浜うどん、あく巻き、こんにゃく、トマト
〈その他〉… 木城えほんの郷、高鍋大師、トロントロン軽トラ市、アカウミガメ など

＜西諸県支会＞

小林市立野尻小学校　**柏　木　　賢**

昨年度、校長採用と同時に研修委員長を任された。業務内容は年２回の研修会を企画・立案し、地区の校長先生の資質向上を図ることである。

１回目は７月に行い、県大会発表のリハーサルを行う形で実施した。本番は分科会の司会者、記録者も同支会から選出するため、それぞれ担当される校長とともに、当日と同じ流れで発表と協議題に沿って意見交換をした。県大会はコロナの関係で中止となったが、教育的課題の解決に向けて協議を深めることができた。

２回目は１月に学校経営をテーマに講演会を実施した。小林市キャリア教育支援センターの協力をいただき、国の多くの審議会、有識者会議等の委員を歴任されている埼玉県戸田市教育長の戸ヶ崎勤様を講師として招聘した。戸田市で進めている教育改革についてのお話で、管理職のリーダーシップ論、校内研修の改革、ＩＣＴ教育推進、学校のデジタル化による働き方改革、デジタル・シティズンシップ教育、ＳＴＥＡＭ教育の基盤づくり、ＲＳ育成プラン等々、これからの学校教育に必要となる話題に釘付けで多くの示唆をいただいた。

このほか、日本教育会とのコラボ企画として市町教育委員会、一般教諭も対象とし、１２月に「働き方改革」をテーマに研修会を実施した。「働き方改革に関する総理と現場との意見交換会」出席の経験があり、関係著書を多数執筆されているサイボウズ株式会社執行役員社長室長の中村龍太様を講師として招聘した。一早く働き方改革を進めている起業家のお話を通して、今後、学校の進むべき働き方改革のモデル（道標）をお示しいただいた。

コロナ禍真っただ中の研修委員長だったが、どうすれば意義のある研修会を実施できるかという視点で企画・立案し、ＺＯＯＭ形式で会を行い、参加者から多くの有り難い感想をいただいた。今後もこの経験を生かし、相手意識、目的意識を大切にして校長会の一員としての役割を全うできるよう尽力したい。

編集後記

令和６年になりました。新年にあたり、多くの校長先生方が子どもたちに夢やあこがれ、目標をもつことの大切さについて話されたことでしょう。目をきらきらと輝かせながら、自分の夢やあこがれ、目標を語る子どもたちを育んでいきたいものです。

さて、ここに校長会広報紙２２３号をお届けいたします。諸塚村教育委員会教育長の竹内一久様には、御多用の中、特別に御寄稿いただきありがとうございました。また、都城・児湯・西諸県支会の執筆者の皆様、集約・校正に当たってくださった各支会の広報委員の皆様方にも感謝申し上げます。

令和６年も、皆様にとって素晴らしい一年となりますようお祈り申し上げます。